

松下幸之助記念志財団 研究助成

研究報告

(MS Word)

【氏名】黒川智恵美

【所属】(助成決定時) 広島大学大学院国際協力研究科

【研究題目】

スーダン人往還移住民のライフコースと教育：母国への貢献意識に着目して

【研究の目的】(400字程度)

本研究目的は、スーダン人往還移住民(移民、難民、帰還移民)のライフコースと教育経験の結びつきを明らかにし、「意識的往還型」人材が持つと想定される「スーダニーズネス(スーダンへの貢献意識・情意)」を分析することで、意識的往還型人材とはどのような教育経験を得て、どのような要因をきっかけに母国への貢献意識を持つのかを明らかにすることである。「意識的往還型人材」とは、国外で経験を積み、将来的に母国に戻って貢献したいと考える集団を指し、申請者のスーダンでのフィールドワーク研究より明らかになった頭脳流出類型の一つである。また、本研究は個人に焦点をあてた質的調査法およびライフコース・アプローチを研究方法に取り入れることで、開発目標や数字達成に依拠してきた教育開発の分野に、個人の情意的側面を提示し、教育政策や制度、プロジェクト改善の議論の俎上に載せることも目的とする。

【研究の内容・方法】(800字程度)

国外から帰還して母国に貢献する帰還民の事例は、複数の研究より明らかとなっているが、彼らの教育経験や貢献意識を形成する要因は明らかになっていない。本研究が対象とするスーダンは1956年の独立以降、高等教育の普及に力をいれ、初等・中等教育レベルよりも多い予算をあててきた。しかし、トップダウン型の政治体制や国内経済の不安定さが、高度人材の頭脳流出を促進させてきた背景がある。また、国内紛争により多くの難民が発生した。独裁政治、ハイパーインフレーション、ネポティズム、これらの社会問題に起因するスーダン人往還移住民の移動は、年々増加傾向にある。

本研究では、エジプトおよび日本に移住したスーダン人往還移住民を分析対象とした。両国は、スーダン人往還移住民にとって対照的な意味を持つ移住先であり、エジプトは歴史的な移住先、類似したアラブ・イスラーム文化圏である一方、日本は新たな移住先、異なる宗教文化圏である。これら対極にある両国を比較することで、より多角的な視点から意識的往還型人材の様相を明らかにすることができると思う。

データ収集方法は、メッセージャー、ワッツアップ、ズーム、グーグル・デュオのアプリケーションを使用し、一人1、2時間程度のオンライン半構造化インタビューを実施した。インタビューは2020年12月から2021年9月にかけて行われ、在日・スーダン人往還移住民19名、在エジプト・スーダン人往還移住民14名、また日本からの帰還者4名から情報を得た。これら計37名のインフォーマントはいずれも大学に進学した者(1名のみ70代の中等教育修了証資格保有者がいた)で、意識的往還型人材のライフコースを捉えるため、年代は20代から50代と幅広く聞き取りを実施した。今後、段階的質的調査法として、既にインタビューを行ったインフォーマントと1回目の分析結果を基に再度データ収集を行い、さらに分析を行うという作業を繰り返し、分析結果の導出を目指す。

【結論・考察】(400字程度)

①往還移住民のライフコースと教育経験の結びつき：初等から中等教育の教育経験において、貢献意識の形成に特徴的な動きはみられなかった。高等教育においては、スーダンの高等教育を低評価し、より良い修学環境を求めて移住する傾向が日本とエジプトのインタビュー結果より明らかとなった。

②スーダニーズネス生成のプロセスと帰還の関連性：貢献意識の原動力は、スーダン情勢の悪化、スーダンの未開発分野への期待、イスラームの価値観、であることが日本の往還移住民のインタビューより示唆された。また、日本、エジプトの両分析結果より、スーダニーズネスは大学入学前、スーダンにおいて形成される人が多いことも明らかとなった。そして、帰還者のインタビュー結果より、コミュニティからの不当な扱い、スーダンの交通事情、専門職の少なさは、帰還者らに再移住を考えさせ、スーダニーズネスの損失を招く要因になり得ることが示唆された。